第5学年〇組　道徳科学習指導案

日　時　　令和〇年〇月〇日（〇）第〇校時
場　所　　5年〇組　教室
児童数　　〇〇名
授業者

1　主題名　　生きているからこそ　　内容項目　［D　生命の尊さ］

2　ねらい　　生きることの素晴らしさや喜びにふれる登場人物の考え方について話し合うことを通して、生命のもつ尊さや、生命の有限性を捉え、限りある生命を懸命に生きようとする判断力を育てる。
教材名　　「クマのあたりまえ」（出典：「みんなの道徳5」東京書籍）

3　主題設定の理由
⑴　ねらいや指導内容について
本時は、小学校第5学年及び第6学年の内容項目「生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。」に関するものである。これは、生命ある全てのものをかけがえのないものとして尊重し、大切にすることをねらいとしている。
この内容項目について、他の学年との関連をまとめると以下のようになる。

小学校１学年及び第2学年	小学校3学年及び第4学年	小学校5学年及び第6学年	中学校
生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。	生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること。	生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

生命を大切にし尊重することは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に答えようとする心の表れと言える。ここで言う生命は、連続性や有限性を有する生物的・身体的生命、さらには人間の力を越えた畏敬されるべき生命として捉えている。そうした生命のもつ侵し難い尊さが認識されることにより、生命はかけがえのない大切なものであって、決して軽々しく扱われてはならないとする態度が育まれるのである。
高学年児童の段階においては、個々の生命が互いを尊重し、つながりの中にあるすばらしさを考え、生命のかけがえのなさについて理解を深めるとともに、生死や生き方に関わる生命の尊厳など、生命に対する畏敬の念を育てることが大切である。また、様々な人々の精神的なつながりや支え合いの中で一人一人の生命が育まれ存在すること、生命が宿る神秘、祖先から祖父母、父母、そして自分、さらに、自分から子ども、孫へと受け継がれていく生命のつながりをより深く理解できるようになる。そこで、かけがえのない生命を尊重し大切にすることを感じられるようにしていくために、生きることの意義や死と向き合うということの大切さを実

感させたい。

かけがえのない生命を尊重し大切にするということは、自分の人生における生きる意義を考え、充実させ、追い求めていくという側面があると考える。また、そのためには生命の有限性について触れさせることが、「生きる」ということについてより深く考え、死の重さや限りある生命を懸命に生きることの尊さに触れることにつながるとも考える。このことから、限りある生命を懸命に生きようとする判断力を育てるために、生命の有限性や、生きる意義について捉えられるような指導を行っていく。

⑵ これまでの学習状況及び児童の実態について

本学級では、限りある生命を懸命に生きることの尊さを感じられるようにするために、各教科等において以下のような指導を行ってきた。

①理科

「生き物の一年を振り返って」「魚の誕生」「花から実」では、生命の連続性について考えられるようにした。特に、世代間での連続性と、途切れるとその連続性が失われ二度と戻ることはないことについて考えさせた。

②学級活動

避難訓練の振り返りの時は、それぞれの行動の振り返りだけでなく、実際にあった震災や事例を取り上げて、生命を尊重することを自分事として捉えられるような声かけを行ってきた。また、折に触れて、いじめの恐ろしさや、命に関わるニュースなどを、児童の実態に十分配慮した上で話し、考えさせるようにした。

これらの指導により、学級で飼っているメダカを大切に育てたり、インゲン豆を大切に育てようと気にかけたりする児童が多くなった。一方で、それらの命に気をかけない児童もまだ多い。また、人を傷つけてしまう言動をしたり、自分を大切にせずに自分の人生に目を向けなかったり、無気力になってしまったりする児童も見られる。

そこで、限りある生命を懸命に生きることの尊さに気付けるように、生命の有限性や、生きる意義について考えさせたい。

以下は本学級の児童にとった、命と死に関するアンケートである。

道徳アンケート

（令和2年9月30日）

1.「死」について考えたことはありますか。ある人は、どんなときですか。

ある 21人　　ない 10人

あると答えた児童の主な回答例（複数回答）

・事故などのニュースを見たとき（7名）　・近しいものの死を知ったとき（6名）

・ふと思いついたとき（寝る前など）（7名）　・嫌なことをされたり、言われたりしたとき（4名）

2.「死ぬ」とは　どんなイメージですか。
【分類1　感情項目】
・怖い（10名）　・悲しい（6名）　・辛い（4名）　・痛い（2名）　・悪い（1名）
【分類2　事柄・説明項目】
・全てを失う（10名）　・人に会えなくなる（3名）　・命を落とす（2名）
【分類3　死後の世界項目】
・天国や地獄（2名）　・生まれ変わる（1名）
【分類4　その他】
・やりきったのなら悪くはないもの（1名）　・仕方がないもの（1名）

3.「命」とは　どんなイメージですか。
・かけがえないもの（20名）　・人生そのもの（4名）　・つがれてきたもの（3名）　・価値あるもの（金額を例）（1名）
・滅多にないもの（1名）　・もろいもの（1名）　・未知なもの（1名）　・体と結ばれているもの（1名）

4. あなたが生きてきて、うれしいと思うことやよろこびを感じることは　どんなことですか。
・結果が出ること（努力の成果がでる）（10名）　・ほめられること（6名）　・人や仲間といること（5名）
・自分のしたいことをしていること（5名）　・生きているだけでうれしい（4名）
以下1名の回答
・成長すること　・人が喜んでくれること　・感謝されること　・笑っていること　・おいしいものを食べること
・物を買ってもらうこと　・人や物に出会えること　・人に優しくしてもらえること

・考察

死について考えたことがあると答えた児童は3分の2だが、他人の死について考える機会であったものがその半数以上を占め、自分の事としてはとらえてはいない。

また、死のイメージにおいては、自分の死を連想しての「怖い」は10名いるものの、他人の死として捉える「悲しい」や概念的な説明である分類2も多く、自分についてのイメージは多くない。

命に関しては「かけがえのないもの」ととらえてはいるが、これも概念的な説明であって、実感を伴ったものではない。

そして、生きる喜びに関しては、当たり前なことが喜びであると答えている児童もいるが、特別な成果や誰かに認められることにそれを感じている児童も多く、懸命に生きる事への意識は薄い。

⑶　教材の特質や活用方法について

子グマが森を歩いていると、見かけたことのあるおすグマが死んでいるのを見た。死んだおすグマのことが忘れられない子グマは死なないものになりたいと森を探し、石になりたいと石に教えを請う。石になってみた子グマは石（死なないもの）の寂しさや当たり前のことのよさに気付き、死の恐怖を携えつつも、クマのほうがいいとわかり、森の中へ戻っていくという内容である。

限りある生命を懸命に生きることの尊さに気付けるように、生命の有限性や、「生きる意義」について自分事として考えさせるために、本時は「補充」を意図して授業を行い、以下の流れに沿って考えていく。

人間理解を深めるために、おすグマのことが忘れられない子グマに自我関与させて、生命の有限性を自分事として考えさせる。

生きることの意義に気付かせていくために、本当に石になりそうになる子グマに共感させ、生と死を対比させる。

また、価値理解を深めるために、クマの生き方を選んだ子グマに自我関与させ、生きることの辛さ

に触れ、その上で生き抜いて限りある生命を懸命に生きることの大切さについても考えさせていく。

生き方について考える機会は高学年であっても多くはない。今回はこの教材を活用することで、その価値について考えさせたい。

4 指導の工夫

①学習課題の明確化

導入では、ねらいとする道徳的価値への方向付けを図るために、自分が当たり前だと思ってやっていることを想起させ、問題意識をもたせる。

②児童相互の話合いを深める手立ての工夫

児童に限りある生命を懸命に生きることについて多面的・多角的に考えさせるために、ペアや小グループでの話合いや意図的指名、問い返しの発問を適宜行い、ねらいとする道徳的価値について児童一人一人が課題に対する納得解について導きだせるようにする。

③板書の工夫

それぞれの立場や考えを想起しやすくするために、死ぬ（クマの）生き方と死なない（石の）生き方を対比的に示す。ねらいとする道徳的価値についての考えを対比的に示し、学習の流れや児童の思考過程が見えるようにする。

④ワークシートの工夫

振り返りでは、教材を離れ、書く活動を通して、ねらいとする道徳的価値の自覚及び自己の生き方について考えを深めさせる。

⑤問い返しの工夫

自分との関わりで道徳的価値を理解するために「命に限りがあると気付いた子グマはどんなことを考えたのだろう」「生きていく中で、兄グマとけんかをするなど、辛いことがあるかもしれない」といった問い返しを予め想定しておき、切実感をもって考えさせる。

5 学習指導過程

段階	学習活動（○主な発問）	・予想される児童の発言	・指導上の留意点 ☆評価の視点
導入	1「限りある生命をどのようにして生きていくか」について考える。 ○みんなが「あたりまえ」に行っていることはどんなことですか。	・あいさつすること。 ・食べること。 ・呼吸すること。 ・友達と遊ぶこと。	・授業全体を通して追求していく学習課題を掲げて問題意識をもたせ、ねらいとする道徳的価値への方向付けを図る。 ・日常生活と関連付けながら、自分事として考えられるようにする。

	問題意識をもたせる導入 T：今日は限りある命をどう生きるかについて考えていきます。 みんなが「あたりまえ」に行っていることって何かなって考えてもらいます。（ワークシート記入） T：どんなことをあたりまえにしているか言ってくれる人。 C：ご飯食べる。 C：空気を吸っている。 C：体を動かすこと。 C：勉強すること。 T：あたりまえにしているの？（ざわつく） 今日は限りある命について「くまのあたりまえ」という話で考えていきます。 みんなは子ぐまになったつもりで限りある命について考えていきましょう。 限りある生命をどのようにして生きていくか。		
	2「クマのあたりまえ」を読んで話し合う。		・本時は、教材を通じて「限りある生命をどのようにして生きていくか。」について考えることを伝える。
・子グマが森を歩いていると、見かけたことのあるおすグマが死んでいるのを見た。死んだおすグマのことが忘れられない子グマは、生きるということについて考えていく。			
展開	⑴　子グマが死んだおすグマのことを忘れられないのはどうしてでしょう。	・初めて見たから。 ・死ぬことについて考えたら怖くなったから。 ・死にたくないから。 ・自分もいつか死んでしまうかもしれないと思ったから。	・命には限りがあることに気付いたときの思いを、子グマに自我関与して考えさせる。 ・人間理解を深めるために、死んだおすグマのことが忘れられない子グマに共感させる。
	⑵　子グマが「ほんとうに石になっちゃうかも」となったとき、どんなことを思ったのでしょう。	・石になりたくない。 ・石の生き方はしたくないな。 ・やっぱりクマがいい。	・死なない生き方に共感させ、死ぬ生き方と対比的に考えることで「生き方」について考えを深める。 ☆対比させることで生き方を明確にし、その上で自分の意見と友達の意見を比べながら聞き、友達の考えを聞いて気付いたことや考えたことを伝えようとしている。

	⑶　石の生き方ではなく、クマの生き方を選んだときの子グマの思いを考えましょう。	・死なない生き方はつまらないな。 ・死ぬことはこわいけど、クマの生き方の方がいいな。 ・あたりまえにやっていることって、実はすばらしいんだな。	・限りある生命を懸命に生きることの尊さについて考えさせる。 ・価値理解を深めるために、生きていく上での辛さについても触れる。

価値理解を深める話合い

T：石の生き方ではなく、くまの生き方を選んだ時ってこぐまはどう思った。
C：どっちにしようかなって迷っている。
T：どっちって。
C：石の生き方も悪くないのかなって。少ししかやってないから、もうちょっとやってみてもいいのかなって。くまは死んでしまうけど、他のくまと遊べたりする。
C：絶対にくまがいい。
T：どうして。
C：足かいたりできる。
T：あたりまえでいい。
C：石の生活をしていても意味がない。くまは色んなことができて、色んなことを思える。
T：生きている意味がない。
C：（うなずく）
C：あたりまえだからこそいい発見がある。
T：あたりまえだけどいいことありそう。
C：石になるってことは一生死なないけど、一生つまらない。だったら、死んでしまってもそのほうがいい。
T：みんなはどう。
C：石の生き方を体験してくまにもどってみて、あたりまえにしていたことが、ありがたみを感じることができる。
T：石の気持ちになってみたからくまがいいって思った。
　みんなはどう思う。
C：あたりまえのよさを感じた。
T：あたりまえのありがたみ？

	3学習課題について考えをもつ。 ○これまで、限りある生命を大切にしてきましたか。また、その上でこれから、限りある生命をどのように生きていきますか。	・何事も一所懸命に取り組もう。 ・当たり前のことを大切にしよう。 ・自分らしく生きよう。	・これまでの学習から、限りある生命を懸命に生きることに考え、これからの自分自身の生き方につなげていく。 ☆限りある生命を懸命に生きるために大切なことについて、自分の生

		[redacted]	き方と関連付けながら考え、ワークシートに書いている。 （発表、つぶやき、表情、ワークシート）
	自己を見つめる C：限りある生命を大切にしていきたい。 これまでの自分は生きることがあたりまえだとおもっていた。 これからは生き方を選んでいきたい。 C：自分にとってあたりまえであっても特別なこと。 自分がしていることはあたりまえではなく、特別だと思って生きたい。		
終末	4教師の説話を聞く。		限りある生命を懸命に生きることのよさについて感じた指導者の話を聞く。

6　他の教育活動との関連

・国語

「たずねびと」では、主人公の気持ちの変化を追いながらも、原爆の悲惨さや戦争で命を失い、誰にも思い出されない「アヤ」について考える。また、「笑って長く生きてね」というおばあさんの願いについて読み取らせる。「大造じいさんとがん」では、懸命に生きる残雪と、その生き方に触れてだんだんと見方が変わっていく大造じいさんについて優れた表現に着目しながら読み取らせる。

・理科

「人の誕生」においては、「魚の誕生」よりもより具体的に自分事として命を捉えさせ、誕生の過程や母体内での成長から、誕生の重み、死の重み、連続性や有限性についても指導していく。

7　評価の視点

【物事を多面的・多角的に考えている様子】

・生きることの意義について、友達の発表を自分の意見と比べながら聞き、多様な視点から考えている。

【道徳的諸価値についての理解を自分との関わりで深めている様子】

・限りある生命を懸命に生きることの大切さについて、自分との関わりで考えている。

8　板書計画

限りある生命を
どのようにして生きるか

＜当たり前にしていること＞
・あいさつすること。
・食べること。
・呼吸すること。
・友達と遊ぶこと。

当たり前のことを大切に
生きる
自分らしく生きよう

クマのあたりまえ

だれでも死ぬ

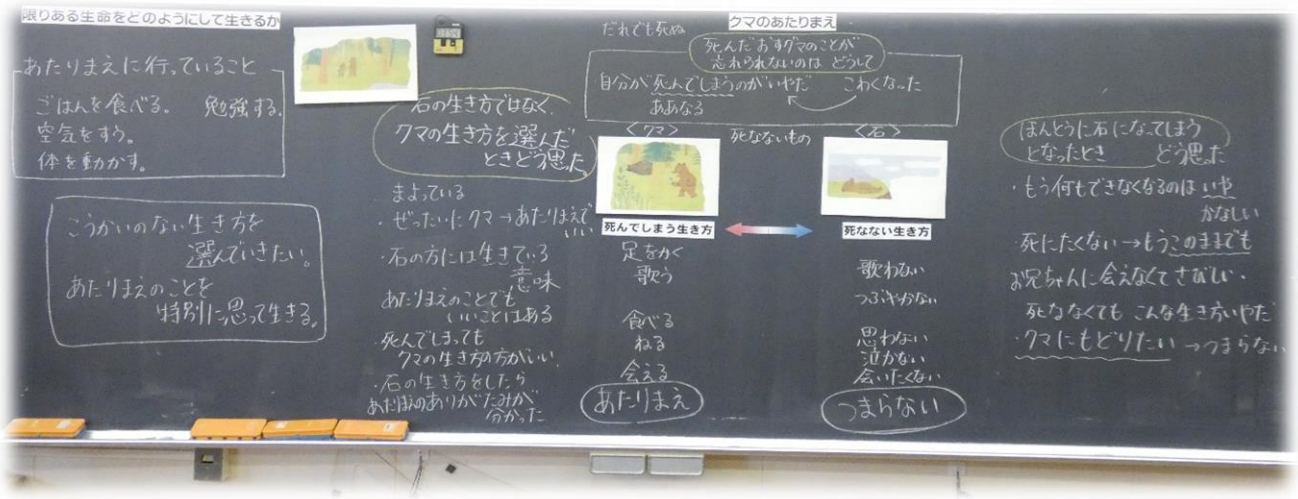
死んだおすグマを忘れられない
・初めて見たから。・死ぬことについて考えたら怖くなったから。・死にたくないから。・自分もいつか死んでしまうかもしれないと思ったから。

死なないものに生まれたかった

石の生き方ではなく、
クマの生き方を選んだ
・死なない生き方はつまらないな。
・死ぬことはこわいけど、クマの生き方の方がいいな。
・あたりまえにやっていることって、実はすばらしいんだな。

クマ		石
死んでしまう生き方		死なない生き方
歌う	↔	歌わない
足をかく	↔	
	↔	つぶやかない
食べる	↔	
	↔	思わない
ねる	↔	
会える	↔	会いたくない
	↔	泣かない

あたりまえ。でもいい

つまらない

ほんとうに石になっちゃうかも
・石になりたくない。
・石の生き方はしたくないな。
・やっぱりクマがいい。